

別府大学付属博物館の展示活動

—「九州の縄文文化展」—

別府大学では創立30周年記念として別府大学付属博物館が建設され、昭和52年の夏に完成した。正式の開館記念の特別展が53年の春に計画されており、その間を利用して「九州の縄文文化展」を開催した。これは別府大学考古学研究所蔵の考古資料を中心にした展示であり、これからの当館における常設展示の主体をなすもので、その展示は大きく三つのパートに分かれている。

第1は縄文式土器の変遷に主眼を置き、九州内の代表的な完形資料を早期から晩期まで時期に従って展示を行なっている。所蔵資料で展示の為の好資料に欠ける点は九州内の各機関などの協力を得ることによって十分おぎなう事が出来、一段と充実したものになることができた。これによって時期による縄文式土器の形態や文様の違いが一目で理解出来、また地域による特色についての関心が示めされることを考慮した展示につとめた。なお壁面は九州の縄文時代の概要、九州の縄文土器などの説明パネルと展示された縄文式土器が出土した遺跡の写真パネルを使用した。

第2は縄文時代の生活の中で大きなウエイトを占めている生業について、各遺跡出土の石器、骨角器などの資料を用途、機能別に狩猟具、漁撈具、採集・栽培具と区別して展示を行ない、それに工具をつけ加えた。壁面には「縄文時代の道具とはたらき」と題して、石器・骨角器類などの用途による分類、対象物など図式化したパネルを展示した。特に縄文時代晩期の代表的な遺跡である大分県大石遺跡の扁平打製石斧や石包丁形石

器・石鎌形石器など原始農耕の存在を予想させる資料を多数展示して特色を表わした。

第3は土偶、石棒、玉類をはじめとする各種の垂飾、貝輪など、縄文時代の精神生活の一端を如実に示めすものと考えられる呪術具、装身具などの展示を行なった。

今回の縄文文化展の見学者については、博物館が大学構内に所在している事もあって、その大半は別府大学の学生で占められており、個人的な見学と共に考古学関係の講義、演習など、授業の一環としても利用されている。

外部からの見学者は少ないが、これは正式な開館がなされていない事や地域社会への働きかけが積極的に行なわれていないためであり今後の普及活動の必要性が問われている。

特別展の開催

53年の5月から6月にかけて、開館記念の特別展として「日本の縄文土器展」を計画している。縄文土器は考古学上の貴重な資料であると同時に美術工芸の上でも好資料として高く評価され、各種の印刷物によって紹介されているが、九州の地にあって各地域の縄文土器を直接目にする機会は階無に等しい現状である。そこで日本各地の代表的な資料の集成を行なうことにより、縄文時代の造形への意欲や美意識をじかに感じ、合わせてその時代の背景について考えることを目的とした計画を進めている。

(橘 昌 信)